

国際連盟は、総会の解散決議（1946 年 4 月 18 日。全会一致〔ただし、総加盟国 45 カ国のうち 35 カ国のみ出席〕）により解散された。以下は、解散決議の抜粋である¹。

The Assembly of the League of Nations,

Considering that the Charter of the United Nations has created, for purposes of the same nature as those for which the League of Nations was established, an international organisation known as the United Nations to which all States may be admitted as Members on the conditions prescribed by the Charter and to which the great majority of the Members of the League already belong;

Desiring to promote, so far as lies in its power, the continuation, development and success of international co-operation in the new form adopted by the United Nations;

Considering that, since the new organisation has now commenced to exercise its functions, the League of Nations may be dissolved; and

Considering that, under Article 3, paragraph 3, of the Covenant, the Assembly may deal at its meetings with any matter within the sphere of action of the League:

ADOPTS THE FOLLOWING RESOLUTION:

1. (1) With effect from the day following the close of the present session of the Assembly, the League of Nations shall cease to exist except for the sole purpose of the liquidation of its affairs as provided in the present resolution.

(2) The liquidation shall be effected as rapidly as possible and the date of its completion shall be notified to all the Members by the Board of Liquidation provided for in paragraph 2.

5. The Assembly approves and directs that effect shall be given in the manner set out in the Report of the Finance Committee to the “Common Plan for the Transfer of League of Nations Assets,” which was drawn up jointly by a United Nations Committee and the Supervisory Commission, acting respectively on behalf of the United Nations and the League of Nations, and was approved by the General Assembly of the United Nations on February 12th, 1946.

そして、パラ 5 にあるように、国連総会は、国際連盟の資産や一部の権限を引き継ぐことを 1946 年の総会決議 24(I)で決定している。

国際連合は、国際連盟の委任統治制度（国際連盟規約 22 条）を引き継ぐ信託統治制度を導入した（国連憲章 12 章）²。連盟期の委任統治領が信託統治制度の下に置かれるためには、委任統治の受任国と国連との間で信託統治協定を締結することが必要とされた（国連憲章 77 条 1 項）³。そして、国際連盟総会は、1946 年 4 月 18 日に、委任統治に関

¹ 全文は、League of Nations, Document A.32.(1).1946X. pp. 12-16, reprinted in [International Organization](#), vol. 1, 1947, p. 246.

² 信託統治制度の詳細については、回を改めて学ぶ。ここでは、委任統治がどのようにして信託統治に引き継がれたかについてのみ検討する。

³ 上記国連総会決議 24(I)は、以下のような I.C.項をおいていた。

する連盟の機能も終了する旨の決議⁴を採択した。

“Recalling that Article 22 of the Covenant applies to certain territories placed under Mandate the principle that the well-being and development of peoples not yet able to stand alone in the strenuous conditions of the modern world form a sacred trust of civilization :

.

3. Recognizes that, on the termination of the League’s existence, its functions with respect to the mandated territories will come to an end, but notes that Chapters XI, XII and XIII of the Charter of the United Nations embody principles corresponding to those declared in Article 22 of the Covenant of the League ;

4. Takes note of the expressed intentions of the Members of the League now administering territories under Mandate to continue to administer them for the well-being and development of the peoples concerned in accordance with the obligations contained in the respective Mandates, until other arrangements have been agreed between the United Nations and the respective mandatory Powers.”

日本の委任統治領については、1947 年 2 月 17 日にアメリカ合衆国が自国を受託国とする信託統治領とする信託統治協定案を安保理に提出した ([U.N. Doc. S/281](#))。国連憲章 79 条によれば日本の同意も必要ははずであるが、敗戦国であり占領下にある日本の同意を要するとすることは政治的にあり得ないと考えられていたようである。もっとも、法的には何らかの説明が必要であるところ、上記案の前文には、国連憲章 79 条に言及しないまま、“Japan, as a result of the Second World War, has ceased to exercise any authority in these islands”とだけ書かれている。もっとも、この案を審議した安保理の場では、米代表は以下のように述べている。

C. Functions and Powers under Treaties, International Conventions, Agreements and Other Instruments Having a Political Character

The *General Assembly* will itself examine, or will submit to the appropriate organ of the United Nations, any request from the parties that the United Nations should assume the exercise of functions or powers entrusted to the League of Nations by treaties, international conventions, agreements and other instruments having a political character.

⁴ 以下の 1950 年勧告的意見の 134 頁に引用されている。

As a result of the war, Japan has ceased to exercise, or to be entitled to exercise, any authority in these islands. These islands were entrusted to Japan under mandate from the League of Nations after the first world war. In utter disregard of the mandate, Japan, contrary to the law of nations, used the territories for aggressive warfare against the United States and other Members of the United Nations. Japan, by her criminal acts of aggression, forfeited the right and capacity to be the mandatory Power of the islands. The termination of Japan's status as the mandatory Power over the islands has been frequently affirmed: in the Cairo Declaration of 1943, subsequently reaffirmed in the Potsdam Declaration and in the instrument of surrender accepted by the Powers responsible for Japan's defeat.

[U.N. Doc. S/PV.113](#)

しかし、最終的に採択された Trusteeship Agreement of Former Japanese Mandated Islands ([United Nations Treaty Series, Vol. 8](#), No. 123, p. 189; see also U.N. Doc. [S/RES/21\(1947\)](#)) には、このハイライト部分は含まれておらず、米提出の原案と同じ表現が前文で用いられている。そして、この国連と米との協定に基づき、米による信託統治が始まった⁵。

この時点では、米による信託統治が始まったとはいえ、日本による委任統治が終了したかどうかははっきりしていない。上記 1946 年 4 月 18 日連盟総会決議は、委任統治に関する its functions が終了すると述べただけで、委任統治制度そのものが消滅するとも委任国の権限も終了するとも述べていない。これは、委任統治の法的根拠は連盟と受任国との合意にあるという立場を前提にしているものと考えられる。この場合、連盟が「委任統治は終了する」との意思表示をしたとしても、それは合意の一方当事者の単独の意思に過ぎず、受任国の権限がそれにより消滅するとは限らない。先に触れた国連憲章 79 条が委任統治受任国の同意を必要としていることも同様の理解に立つものと考えられる。米を含む連合国側もこの問題は認識していたようであり、結局、1951 年の[対日平和条約](#) 2 条(d)により日本が自ら放棄する形をとることによって法的に決着した⁶。

⁵ なお、第 1 条によりこれら諸島は strategic area とされ、通常の信託統治でなく戦略的信託統治（国連憲章 82 条・83 条）とされた。

⁶ 米による戦略信託統治は、[安保理決議 683 \(1990\)](#)（ミクロネシア連邦およびマーシャル諸島共和国が独立、北マリアナ諸島が米自治地域となる）ならびに[安保理決議 956 \(1994\)](#)（パラオ共

他方、南西アフリカ（現・[ナミビア](#)）については対立が長引き、その過程で国際連盟から国際連合への権限の引き継ぎが争われる事態となった。南西アフリカは、1884-85 年のベルリン会議（第 1 部 1. で扱った「会議システム」の会議の一つ）以降ドイツの保護領となった。第一次世界大戦後、南西アフリカは南アフリカを受任国（Mandatory）とする委任統治（Mandate）領となる（[リンク先](#) [要 [プラグイン](#)] の 89-90 頁。英語版は仏語版の後）。

第二次大戦後、南アフリカは、南西アフリカを信託統治制度の下に置く（＝信託統治協定を国連との間で締結する）ことを拒否し、南西アフリカの法的地位について国連との間で対立が生じた。1948 年に南アフリカがアパルトヘイト政策を公式に導入し、それを南西アフリカにも適用するようになると、対立はいつそう激化した。

そこで、国連総会は国際司法裁判所に勧告的意見⁷を求めた。1950 年の「[南西アフリカの法的地位に関する勧告的意見](#)」（裁判所のページは[こちら](#)）【判例国際法（第 3 版）31A、国際法判例百選（第 3 版）42】129 頁に載っている(a), (b), (c)の三つの問に対する答を求めたのである。この講義では、このうち(a)のみ（意見 131-138 頁）に注目する。裁判所は、南アフリカが国際連盟に対して負っていた義務を、連盟解散後には国際連合に対して負うようになった、と述べている。その理由はどのようなものか。上記範囲を全部読むのは大変だが、とりあえずマークした部分とその周辺のみ見れば、十分理解できる。講義で丁寧に読み解くので、事前に目を通しておくこと。

その後、膠着状態が続き、国連総会は 1966 年に[決議 2145 \(XXI\)](#) を採択し、南アフリカによる委任統治を終了した（決議パラグラフ 4）。そして、[安保理決議 276 \(1970\)](#) 2 項で南アフリカの「居座り (continued presence)」が違法であると宣言されたにもかかわらず南アフリカが南西アフリカ（その頃「ナミビア」と改称）に居続けていることの法的帰結につき改めて国際司法裁判所に勧告的意見が求められ、裁判所は 1971 年に勧告的意見（「[ナミビア勧告的意見](#)」）（裁判所のページは[こちら](#)）【判例国際法（第 3 版）75、国際法判例百選（第 3 版）60】を公表した。そこでの論点の一つは、国連設立以前から存在する委任統治を終了する権限を国連総会が有するか、であった。これについて、裁判所は意見のパラグラフ（ページではない）102-103 で回答している。どのような理由付けなのか、読んで考えてくる。なお、この問題はパラ 96 から議論されているのでそこから読むのが望ましい。また、パラ 55-81 において、1950 年の勧告的意見で扱われた問題が再び議論されている。マークした部分のみでよいのでそこにも目を通してくること⁸。

以上

和国独立) により終了した。

⁷ 勧告的意見については国際法（対人管轄・紛争）で学んでいる。教科書で確認されたい。

⁸ その他、ナミビア問題の詳細については、参照、家正治『[ナミビア問題と国際連合](#)』（神戸市外国語大学外国学研究所、1984 年）、中野進「ナミビア独立とその後（1）・（2・完）」[志學館法学](#) 11 号（2010 年）165 頁、12 号（2011 年）69 頁。